

園芸福祉活動記録 社会福祉法人水平会 総合福祉施設「ホライズン」

平成17年10月に社会福祉法人水平会の総合福祉施設「ホライズン」の維持管理業務を受けて、新しいサービスの開発を考えるようになりました。そうして辿り着いたのがNPOとの協働による環境福祉サービス「園芸福祉活動」です。このサービスでは2つのNPOのご協力を得て進めることになりました。

【園芸福祉活動の指導】

特定非営利活動法人
たかつき

大阪府高槻市の緑豊かな自然に恵まれた環境のもと、街かどデイハウス「晴耕雨読舎」・デイサービスセンター晴耕雨読舎での高齢者サービスを展開。NPO法人日本園芸福祉普及協会の理事として園芸福祉の普及活動に取り組まれている。

【まちづくりマネジメント】

特定非営利活動法人
福祉のまちづくり実践機構

福祉のまちづくりに関連する調査、研究、企画立案。「日本型CAN研究会」（代表：炭谷茂前環境事務次官）を通じたソーシャル・インクルージョンのまちづくりの実践、園芸福祉マネジメント、コミュニティ・ビジネスのコンサルティングなど幅広い活動を手がけられている。

Chapter1 社会福祉法人水平会の総合福祉施設「ホライズン」の清掃業務を受けて

これまで当社は、主に公共施設の維持管理業務を受注し、知的障がい者やホームレスなど社会的に困難を抱える人たちの雇用に取り組んできました。

これまでとは異なる民間の福祉施設（社会福祉法人水平会の総合福祉施設「ホライズン」）では、いったいどのようにすれば業務に従事する障がい者や元ホームレスの人たちが施設内での職員や利用者に快く受け入れていただけるのか、顧客の満足度を得られるのか、社会福祉法人水平会のために役に立てるのが私たちの課題でした。

Chapter2 社会福祉法人水平会への環境福祉サービスの提案

平成17年12月より、社会福祉法人水平会のご理解やNPO法人たかつきの協力を得て、働く人たちの職場環境を整えるための施設への環境福祉サービスとして、施設利用者を対象とした園芸福祉活動を実施することになりました。

NPO法人との協働によるサービスは、清掃業者としてはこれまでにないサービスを提供することで得られる効果への期待と、園芸福祉の効用と意義を見つけ出すための新しい試みでもありました。

Chapter3 プログラムづくりからはじめる園芸福祉活動～NPOの専門性を活かす

園芸福祉活動では、特別養護老人ホーム（高齢者）と地域活動支援センター（知的障がい者）の異なる特性を持った15名を対象とし、プログラムづくりからはじめていくことになりました。

参加者の様子や変化などを振り返りながらグループで活動していくなかで、五感を刺激し、参加者一人ひとりの意欲や可能性を引き出せるように、プログラムづくりに工夫を凝らしてきました。

また、異なる特性を持った方が対象であることから、特性に合わせた役割を付けていくことで、単なる交流に止まるのではなく、お互いに助け合い、役立てられるよう、相互の関係を大切にしてきました。

園芸福祉活動でのプログラムづくりや進め方、振り返りなどは、知的障がい者を雇用し、定着へと結び付けていくための支援者との協働による作業工程の職務分析や障がい特性に応じた課題分析、ケース会議などのプロセスと共通する点が多くみられます。参加者の可能性を引き出すためのプログラムづくりは、当社での障がい者の雇用にも役立ちました。個々の適性に合わせて小さな目標を持ち、段階的な指導によって達成感を味わっていただくことによって職業意識の向上を図り、知的障がい者のスキルアップへとつなげていくためのヒントになりました。また障がい者の就業後の余暇活動として、職場での園芸福祉活動を実施することで、植物をコミュニケーションツールとして活用し、就業時に見られない可能性（能力）の新たな発見などの収穫がありました。このように、ほんの些細な「気づき」を事業活動にフィードバックさせることによって、会社の付加価値を作り出していきたいと考えています。

【プログラム事例】植物のすべてのプロセス 種子～発芽～生長～開花～結実～収穫

- ①育てた野菜を収穫し、簡単な調理をして味わう（達成感・味覚）
- ②ハーブの匂いを嗅ぎ、ハーブティーを飲んでみる（臭覚）
- ③普段使わない道具（ハサミ等）を用いて作業する（筋力運動）
- ④クラフト作り（創作意欲・視覚）
- ⑤作業の手順などの指導を受け、理解される（思考力）
- ⑥植物にまつわる昔話、会話（記憶を呼び起こす）
- ⑦毎週火曜日に実施する園芸福祉活動（生活リズム）
- ⑧高齢者と障がい者との作業工程での役割分担（役立ち・交流）
- ⑨施設内での作品の展示、活動報告（達成感・評価を受ける）
- ⑩植物の生長を見届ける、季節を感じる（生きがい）
- ⑪行動範囲を広げてみる「自分で歩きたい」「花を触りたい」（意欲・可能性を引き出す）
- ⑫ガーデンの花を摘む

◆フラワーアレンジメント（知的障がい者が活動のお手伝い）～作品の展示



◆育てた野菜の収穫～道具を用いる～簡単に調理して味わう



◆手作りプランターの寄せ植え（二毛作）～夢中になって立ち上がる



Chapter4 問題意識を共有する～施設職員とのワークショップによる「気づき」の確認

活動をはじめた当初は、活動時に介助を必要とされる職員側からすれば、仕事量が増えてしまうことになり、参加される高齢者や障がい者の方たちも不安そうな面持ちでした。けれども根気よく続けていくことで、徐々に職員や参加者からの私たちへの対応に変化が見られはじめました。

活動を実践していくなかで、私たちがいちばん大切にしてきたことは、活動による参加者の様子や変化などへの「気づき」と、活動を進めていく上での施設内の事情を知ることです。

そこで日々の振り返りに加えて、活動後の変化や活動による効果、また活動を進めていくうえでの問題点や課題点を、数ヶ月間の振り返りやまとめとしてワークショップを行いました。これからの活動をより意義深いものにしていくために、活動で介助していただく職員や、参加者に日常的に関わられている職員の方々との、意見交換などのコミュニケーションの場を設けて情報の共有化を図り、活動に反映させるように努めてきました。

Chapter5 施設間のつながり～広報活動「火曜日園芸通信」

園芸福祉活動の報告をしていくことで、施設間の交流を深め、互いに関心を持っていただくことは非常に重要であると考え、「火曜日園芸通信」を月1回発行し、施設関係者への情報発信として行っています。

園芸福祉活動をはじめてもっとも興味深く感じられたのは、利用者と施設職員、また施設間の職員のつながり（横のつながり）が以前よりも強くなってきたことです。つながりが強まりコミュニケーションの向上が図られると、施設間の情報交換が活発になり、資源の有効活用や福祉サービスのヒントなど、新しい発見が得られ易くなります。情報を発信することで情報が得られ、相互に活かすことで施設の魅力が増し、施設全体の活性化につながります。

Chapter6 活動による効果と成果、課題

園芸福祉活動をはじめて2年近くなると、ワークショップによる施設との意識の共有化が図られ、参加者の変化が見えはじめました。

ホライズンにおける園芸福祉の発展を願い、清掃業者からのサービスの枠を越えて、施設の利用者サービスとして広げていくことが、私たちの新しいサービスとして位置付けられていくべきではないかと考えるようになっていきました。

【施設職員からの声】

- ①利用者さんの可能性が見出せた。次のケアへとつながっている。
- ②施設入所時に不安がっていた利用者さんの気持ちが安定してきた。
- ③利用者さんが毎週火曜日を楽しみにされている。
- ④参加される方が多くなってきた。
- ⑤園芸福祉をはじめて、施設の中が花で華やかになった。
- ⑥利用者さんのご家族にも喜んでいただいている。
- ⑦活動を通じて、特別養護老人ホームと地域活動支援センターとの交流を深めることができ、利用者さんの社会性が養われているように思う。これから施設独自の活動として老健施設や地域へと広げていきたい。
- ⑧地域活動支援センターでの就労を目的とされている利用者さんには、活動のお手伝いをするのが訓練の一部になっている。また最近では、自ら進んでお手伝いを申し出る利用者さんもいる。
- ⑨職員が日常の業務に追われるなかでの、活動時の介護に当たる職員配置が難しい。

◆園芸福祉活動での参加者の表情





Chapter7 新しい課題～サービスの限界

施設内で園芸福祉活動が浸透していくにつれ、活動の参加者の人数が増え、現状では十分なフォローが難しくなってきました。清掃業者からのサービスの枠には限りがあり、施設側の対応が求められるようになってきたのです。

昨今の法改正による社会福祉法人の厳しい情勢のなか、施設に園芸福祉指導等にかかる費用について負担していただかなければならず、そのための予算枠、費用対効果などの検討が大きな課題になりました。

当社と NPO 法人たかつき、そして NPO 法人福祉のまちづくり実践機構にも協力を依頼し、福祉施設での新しいモデルケースとして進めていくための打開策、つまり低コストによる活動拡大の提案をさせていただくことになりました。

社会福祉法人水平会も利用者の要望に応えるべく、施設自らが園芸福祉に取り組んでいくことを決定してくださいました。



Chapter8 新しい展開～大阪府の民間社会福祉施設における先進的取組パイロット事業

園芸福祉活動を福祉施設での新しい事業として取り入れていくには、園芸クラブとの違いを明確にしたうえで、活動が及ぼす効果と可能性、費用対効果などへの提案が求められるようになってきました。

【園芸福祉活動の可能性】

- ① アクティビティサービスへの活用
- ② 園芸療法への展開について
- ③ まちづくりの観点から、園芸福祉をツールとした地域との関わり方（福祉施設の地域貢献）
- ④ 地域資源の有効活用など

そんなとき、NPO 法人たかつきの提案により、大阪府の民間社会福祉施設を対象とした地域貢献事業の公募に「ホライズン」で応募することになりました。施設との協業者として、当社、NPO 法人たかつき、NPO 法人福祉のまちづくり実践機構が加わった「園芸福祉を通じた地域貢献事業」の提案が選定されました。

具体的には、

- ①コミュニティガーデンを開設し、地域の高齢者、障がい者、ニートの若者、子どもなどのコミュニティの場を形成し、孤立を防ぐソーシャル・インクルージョンのまちづくり、地域福祉の向上に貢献すること。
- ②福祉施設等園芸福祉研究会及び人材育成事業を実施し、施設における園芸福祉活動やコミュニティガーデンの場を活用して、各地域で福祉施設や福祉のまちづくりに取り組むグループとの交流を図り、福祉施設における園芸福祉の取組みの促進やその担い手育成に寄与すること。

平成19年10月から平成22年3月までの2年半の事業がはじまりました。

Chapter9 「園芸福祉を通じた地域貢献事業」初年度（平成19年度）

初年度は半期しかなかったため、施設内の園芸福祉活動の拡充を図りながら事業のコア人材の育成と、コミュニティガーデンの準備を中心に進めてきました。

とくにコミュニティガーデンの準備として、平成20年5月オープンを目指して、ホライズン全域の担当職員のほか、地元地域からはニートの若者の自立支援に取り組むNPO法人おおさか若者就労支援機構、障害者就業・生活支援センターを運営するNPO法人ほっぷ、地域若者サポートステーションを運営する南大阪若者サポートステーション等にも参加を呼びかけてワークショップを行い、事業の説明、協力の依頼、意見交換などを行いました。

また、毎週火曜日の園芸福祉活動にも各団体のスタッフに参加していただき、初級園芸福祉士の資格取得、コミュニティガーデンの準備（作業協力）へと進めていくことができました。

Chapter10 コミュニティガーデン「さんかくん」のキックオフ

平成20年5月、コミュニティガーデンのキックオフイベントが予定通り開催され、ホライズン職員、おおさか若者自立塾のスタッフ及び塾生、地域の子どもやお年寄りなど、たくさんの方々のご参加、ご協力により予想以上の賑わいとなりました。コミュニティガーデンの名称は、一般公募により「トライアングル」が選ばれました。土地の形状（三角）からヒントを得られたようですが、当選者とスタッフとの相談の結果、「さんかく（三角・参画）」から「さんかくん」へと名称が修正され、最終決定しました。ガーデンの顔ともなる看板はおおさか若者自立塾塾生の卒業作品です。



◆コミュニティガーデン「さんかくん」のキックオフの様様



Chapter11 「園芸福祉を通じた地域貢献事業」今年度（平成20年度）の展望

コミュニティガーデンがオープンして、今年度がこの事業にとっていちばん重要な年になります。コミュニティガーデンの運営管理、各団体や地域の具体的な活用方法についての検討、そしてホライズンや地域の各団体のコミュニティガーデンでの活動報告を外部的に向けて発信することにより、次年度への発展へと結びつけることができるものと考えます。

ボランティアではなく事業として進めていくためには、今年度で必ず成果を挙げることが私たちの責務であると考えています。そのためにも現在のガーデンでの活動を記録として残し、各団体の実績にしていく必要性を強く感じていました。

平成20年10月から、参加された団体と一緒にコミュニティガーデンでの活動後に振り返り、記録に残すという作業をいただいています。お互いの「気づき」を確認しあい、次の活動へと活かし、参加者ニーズに合わせた活動内容（プログラム）の充実を図ることを目的として行っています。今年度末に予定しているシンポジウム（発表会）では、その積み重ねた事例を「園芸福祉を通じた地域貢献事業」の中間報告とし、次年度へとつなげていきたいと思えます。



Chapter12 施設の園芸福祉活動～コミュニティガーデンの活用

現在のコミュニティガーデンは、地域活動支援センターが中心になって維持管理をいただいています。施設内での園芸福祉活動では、ガーデンが開設したことにより行動範囲が広がりました。

「自分で歩きたい」「育てた花を触りたい、花摘みをしたい」という参加者の意欲を引き出し、願いが叶った瞬間でもありました。皆さんの優しい笑顔がとても印象的でした。

また、秋も深まった11月には、5月のキックオフイベントで仕込んだサツマイモの収穫が行われました。お天気は良かったのですが、少し肌寒いようだったのでスタッフが迷っていたところ、参加者の達での希望があり実施することになりました。サツマイモを掘りおこす様子をそばで見ながら、我慢できなくなって車椅子を降り、地面に座り込んでサツマイモを掘るなど、無我夢中で活動を楽しんでいらっしゃいました。

◆コミュニティガーデンへの散歩・花を摘む



◆コミュニティガーデンで芋掘りに挑戦!!



◆コミュニティガーデンで芋掘りに挑戦!!



Chapter13 これまでの活動を振り返って～福祉の在り方を考える

施設が事業として進めるに当たっては、園芸福祉活動の位置づけを明確にすることが重要です。

全国でみても、特別養護老人ホーム施設での入所者状況は、ほとんどが定員を満たされており、入所待ちの施設が多いようです。また、福祉施設における園芸福祉活動は、デイサービス（街かどデイハウスも含む）や老健施設で取り組まれているケースが最も多く見られます。これには、園芸福祉活動による介護予防等への効果や美観などが施設のアピールとなり、入所者の増員、介護予防事業への発展など、費用対効果が得られることが考えられます。

ホライズンの場合は、特別養護老人ホームからはじまりました。既に満室状態にある特別養護老人ホームでの園芸福祉活動は、非常に稀なケースであるといえます。

では何故、ホライズンでは特別養護老人ホームから園芸福祉が始まったのか？そもそもの発端は、当社からの環境福祉サービスとしてはじまったことと、受注当初は老健施設等では業務を任されていないからという単純な理由からでした。

特別養護老人ホームでの園芸福祉活動には、いったいどんな意義があるのでしょうか。特別養護老人ホームは、これまでさまざまな人生を経験されてきた方が、介護サービスを受けながら、人生最期の喜びや楽しみを謳歌する場所として私たちは考えています。「福祉」とは、施しを受けるものではなく、人としての尊厳が守られ、幸せになることです。コミュニティガーデンが出来て、特別養護老人ホームの利用者のガーデンへの散歩プログラムが実現したことは、とても意義深いものとなりました。利用者が自らの可能性や期待に胸を膨らませ、生活の一部として活動を楽しみ、生きがいを見出していただくことができたら、福祉施設における至福のサービスへとつながるのではないのでしょうか。

特別養護老人ホームにおける、施設の中に閉じ込められない福祉サービスの実現に向け、新たな魅力として園芸福祉活動を位置付けていただけたら幸いです。

Chapter14 これからの展望～可能性と期待

これからの施設内での園芸福祉活動については、「園芸福祉を通じた地域貢献事業」を活用しながら、老健施設やデイサービスを中心とした介護予防事業の一環として、しっかりと位置づけていくことで、事業として確立させていくことが重要であると考えています。

社会福祉協議会や地方自治体（地域包括支援センター）と連携を図り、包括的な介護予防システムを構築していくことで、ホライズンが地域福祉の拠点となることが、本来の地域貢献事業ではないかと考えます。

これまでの園芸福祉活動の実績に加え、当該施設及び地域の資源を活用し、すでにさまざまな地域で活動されている先進的な事例などを取り入れた新しい事業提案をさせていただけたらと考えています。



株式会社 美交工業
福田久美子

平成20年12月作成